

報道発表資料
平成25年5月16日
気象庁

平成25年度の熱中症対策等に関する気象情報について

気象庁では、今年度、熱中症への注意を呼びかける情報を、5月29日を予測の対象とする情報から発表いたします。

気象庁では、本年度についても下記の情報によって熱中症への注意を呼びかけます。これらの情報では、気温の予測情報と合わせ、関係省庁の協力の下、水分のこまめな補給、冷房の適切な利用等の具体的な熱中症対策を示しています。

それぞれの情報は、5月29日を予測対象とする情報より発表いたします。

1. 高温注意情報

5月28日17時以降、翌日又は当日の最高気温が概ね35℃(※)以上になることが予想される場合に、「高温注意情報」を発表します。

また、高温注意情報の発表とあわせ、5月28日から、気象庁ホームページに主な地点の気温予測グラフを掲載し、熱中症への注意を呼びかけます。

2. 高温に関する気象情報

5月22日以降、向こう1週間で最高気温が概ね35℃(※)以上になることが予想される場合に、数日前から「高温に関する気象情報」を発表します。

3. 高温に関する異常天候早期警戒情報

5月17日以降、5日～14日後を対象として、7日間平均気温が平年よりかなり高い場合に発表される「高温に関する異常天候早期警戒情報」において、7日平均気温が概ね28℃(※)を超える確率が30%以上と予想される場合に、熱中症に対する注意を呼びかけます。

※ 一部地域では、異なる基準を用います。

これらの情報に加え、日最高気温の観測データについての情報(例 35℃以上を観測したアメダスの地点数、最高・最低気温分布予想図)等をまとめた「熱中症に注意」ページを気象庁ホームページに掲載しています。

[<http://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kurashi/netsu.html>]

熱中症対策に関しては環境省のホームページ「環境省熱中症情報」に熱中症対策にとりくむ関係省庁へのリンクとともに「熱中症予防情報サイト」「熱中症環境保健マニュアル」等へのリンクが掲載されています。これらの情報も熱中症対策にご活用下さい。

「環境省熱中症情報」 [http://www.env.go.jp/chemi/heat_stroke/index.html]

[本件に関する問い合わせ先]

気象庁代表 03-3212-8341

1. 高温注意情報、2. 高温に関する気象情報について

気象庁予報部予報課気象防災推進室 (内線 3125)

3. 異常天候早期警戒情報について

気象庁地球環境・海洋部気候情報課 (内線 3154)

高温注意情報の例

埼玉県高温注意情報 第1号

平成25年〇月〇日05時10分 熊谷地方気象台発表

埼玉県では、〇日の日中は気温が35度以上となるところがあるでしょう。
熱中症など健康管理に注意してください。

予想最高気温（前日の最高気温）

さいたま	37度（35.6度）
熊谷	38度（36.7度）
秩父	35度（34.2度）

さいたまで30度以上の時間帯は、8時頃から22時頃まで。

熊谷で30度以上の時間帯は、8時頃から23時頃まで。

秩父で30度以上の時間帯は、9時頃から19時頃まで。

熱中症の危険が特に高くなります。

特に、外出時や屋外での作業時、高齢者、乳幼児、体調のすぐれない方がおられるご家庭などにおいては、水分をこまめに補給し多量に汗をかいた場合は塩分も補給する、カーテンで日射を遮る、冷房を適切に利用し室温に留意するなど、熱中症に対して十分な対策をとってください。

高温に関する気象情報の例

高温に関する東海地方気象情報第1号

平成25年〇月11日15時05分名古屋地方気象台発表

東海地方では、13日から18日頃にかけて、最高気温が35度以上となる所があるでしょう。

東海地方では13日から18日頃にかけて、太平洋高気圧に覆われ、晴れて気温が高くなり、最高気温が35度以上となる所がある見込みです。

熱中症など健康管理、農作物や家畜の管理などに十分注意してください。

高温に関する異常天候早期警戒情報の例

高温に関する異常天候早期警戒情報（関東甲信地方）

平成25年〇月8日14時30分

気象庁 地球環境・海洋部 発表

要早期警戒

警戒期間 〇月13日頃からの約1週間

対象地域 関東甲信地方

警戒事項 かなりの高温（7日平均地域平年差+2.2℃以上）

確率 30%以上

今回の検討対象期間（〇月13日から〇月22日まで）において、関東甲信地方では、〇月13日頃からの1週間は、気温が平年よりかなり高くなる確率が30%以上と見込まれます。

農作物の管理に注意してください。また、熱中症の危険が高まりますので、健康管理に注意してください。なお、1週間以内に高温が予想される場合には高温に関する気象情報を、翌日、又は当日に高温が予想される場合には高温注意情報を発表しますので、こちらにも留意してください。

【急激な気温上昇が予想される場合には以下のコメントを発表】

農作物の管理に注意してください。また、急激な気温上昇の際は、熱中症にかかりやすくなります。体調に配慮しつつ、気温上昇の前に汗をかく機会を増やすなど暑さに慣れる取り組みをしたり、屋外の活動等では飲料水や日陰を十分に確保するなど、事前の熱中症対策を進め、健康管理に注意してください。なお、1週間以内に高温が予想される場合には高温に関する気象情報を、翌日、又は当日に高温が予想される場合には高温注意情報を発表しますので、こちらにも留意してください。

最高・最低気温分布予想図の例

最高・最低気温分布予想

- この図は、日本全国を一辺20kmの正方形のマス目に分けて、そのマス目の中の気温の予想を表示したものです。海上や予測対象でない地域は網掛けで表示しています。
- 毎日5時に当日日中の最高気温、11時に当日日中の最高気温と翌日朝の最低気温、17時に翌日日中の最高気温と翌日朝の最低気温を発表します。5時発表時点の最低気温は前日17時発表のものがそのまま表示されます。

全国：日中の最高気温(°C)

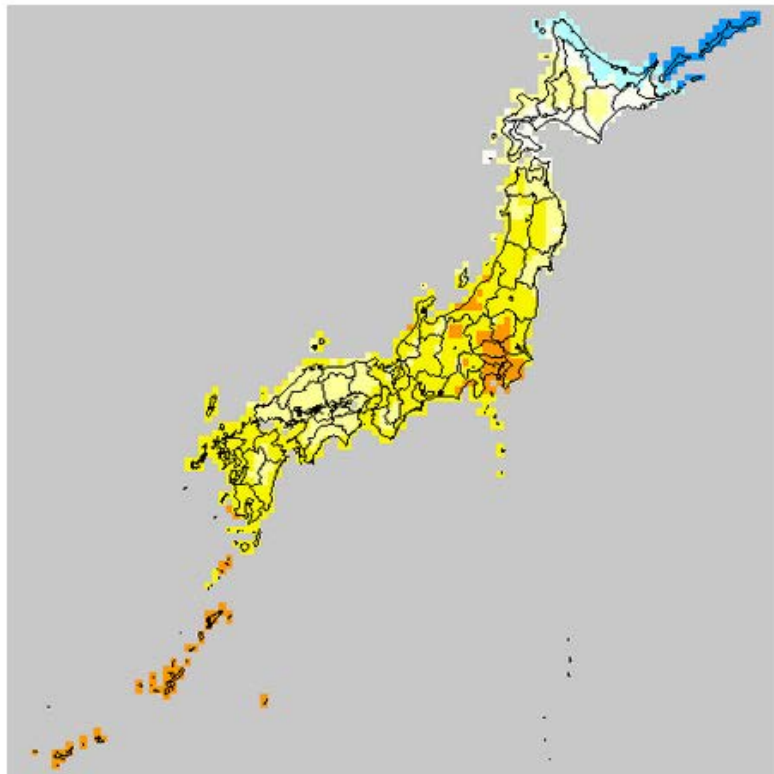
今日：平成25年〇月〇日の予想

最高気温 最低気温

地域名をクリックしてください

全国

- ▶ 北海道地方(北西部)
- ▶ 北海道地方(東部)
- ▶ 北海道地方(南西部)
- ▶ 東北地方(北部)
- ▶ 東北地方(南部)
- ▶ 関東地方
- ▶ 甲信地方
- ▶ 北陸地方(東部)
- ▶ 北陸地方(西部)
- ▶ 東海地方
- ▶ 近畿地方
- ▶ 中国地方
- ▶ 四国地方
- ▶ 九州地方(北部)
- ▶ 九州地方(南部)
- ▶ 奄美地方
- ▶ 沖縄・大東島地方
- ▶ 宮古島・八重山地方



°C 5以下 5~9 10~14 15~19 20~24 25~29 30~34 35以上

(注) 格子の気温を求める際には、格子周辺の複数の観測地点の気温予想を用いることや、格子平均の標高と観測地点の標高の差による高度補正を行うことなどから、天気予報の気温予想と±1~2°C程度の差が生じる場合があります。

(最高・最低気温分布予想図)

http://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/data/kouon/t_maxmin.html

夏（6～8月）の天候

2013年（平成25年）夏（6～8月）の特徴：

○全国的に高温で、東・西日本、沖縄・奄美ではかなり高かった。

太平洋高気圧が日本の南海上から西日本付近で強かったことなどから、夏の平均気温は、全国的に高く、東・西日本と沖縄・奄美ではかなり高かった。特に西日本では+1.2℃と1946年の統計開始以来第1位の高温となった。全国気象官署のうち26地点で夏の平均気温の高い値を更新した。なお、8月12日には、江川崎（高知県）で観測した日最高気温41.0℃が歴代全国1位となった。

○夏の降水量は、東日本太平洋側、沖縄・奄美でかなり少なかった。一方、東日本日本海側と東北日本海側ではかなり多かった。

太平洋高気圧に覆われ晴れる日が多く湿った気流の影響を受けにくかったため、東日本太平洋側、沖縄・奄美では夏の降水量がかなり少なかった。一方で、梅雨前線や湿った気流の影響を受けやすかった東日本日本海側と東北日本海側でかなり多かった。

○7月には山口県や島根県で、8月には秋田県や岩手県、島根県で記録的な豪雨となった。

北日本から西日本の日本海側は西よりの湿った気流が入りやすく、7月28日は山口県や島根県で、8月9日は秋田県や岩手県で、8月24日は島根県で記録的な豪雨となり、河川の増水や土砂災害が発生した。そのほかの地方でも、局地的に非常に激しい雨となる日があった。

1 概況

太平洋高気圧が、日本の南海上から西日本にかけて強かったため、東日本以西は盛夏期に太平洋高気圧に覆われることが多く、北日本でも暖かい空気が流れ込みやすかったことから、全国的に高温となった。暖かい高気圧に覆われた6月中旬、太平洋高気圧が強まった7月前半、8月上旬後半から中旬に北日本から西日本にかけて気温が平年よりかなり高くなり、東・西日本と沖縄・奄美では夏の平均気温がかなり高くなった。特に西日本では、夏の平均気温は+1.2℃と1946年の統計開始以来最も高かった。また、全国の気象官署のうち26地点で夏の平均気温の高い方からの1位を更新した。なお、全国のアメダス観測所927地点のうち125地点（タイ記録も含めると143地点）で日最高気温の記録を更新し、8月12日には、江川崎（高知県四万十市）で日最高気温が41.0℃となり歴代全国1位となった。

沖縄・奄美では、太平洋高気圧に覆われ晴れる日が続いたため、夏の日照時間はかなり多く、夏の降水量がかなり少なくなった。先島諸島では台風の影響で大雨となる日もあったが、1か月以上ほとんど雨が降らないところもあり、農作物の被害や取水制限が実施されるなどの影響があった。7月の月降水量は名瀬（鹿児島県）で0.0ミリ、那覇（沖縄県）で4.5ミリと、7月としては統計開始以来最も少なくなった。また、東日本太平洋側でも夏の降水量がかなり少なくなったため、利根川などでは取水制限が実施された。

一方で、太平洋高気圧の縁に沿って、日本付近には西よりの湿った気流が入りやすかったため、日本海側では大雨となる日があり、夏の降水量は、東日本日本海側や東北日本海側でかなり

り多かった。7月は東北地方に梅雨前線が停滞することが多く、東北地方では雨の日が続き、7月の月降水量は182%と1946年の統計開始以来7月としては最も多くなった。また、7月28日は山口県や島根県で、8月9日は秋田県や岩手県で、8月24日は島根県で記録的な豪雨となり、河川の増水や土砂災害が発生した。そのほかの地方でも、大気の状態が不安定となり、局地的に非常に激しい雨となる日があり、特に7月下旬から8月上旬に多かった。

2 気温、降水量、日照時間等の気候統計値

(1) 平均気温

夏の平均気温は、東・西日本、沖縄・奄美ではかなり高く、北日本で高かった。沖縄・奄美を除いて平年を1℃以上上回った。金沢（石川県）、松江（島根県）、高松（香川県）、福岡など26地点では夏の平均気温の高い方からの1位を更新した。

(2) 降水量

夏の降水量は、東日本日本海側ではかなり多く、北日本日本海側で多かった。酒田（山形県）では夏の降水量の多い方からの1位を更新した。一方、東日本太平洋側、沖縄・奄美ではかなり少なかった。河口湖（山梨県）、宿毛（高知県）、久米島（沖縄県）など8地点では夏の降水量の少ない方からの1位を更新した。北日本太平洋側、西日本では平年並だった。

(3) 日照時間

夏の日照時間は、沖縄・奄美ではかなり多く、北日本日本海側、東日本、西日本太平洋側で多かった。北日本太平洋側、西日本日本海側では平年並だった。

(4) 猛暑日（日最高気温 35℃以上）、真夏日（日最高気温 30℃以上）、日最低気温 25℃以上の日数

夏の猛暑日の日数は、東・西日本で平年を上回ったところが多かった。高松（香川県）、福岡、鹿児島など17地点で日数の最大値を更新し、大阪、福岡など22地点では最大継続日数を更新した（各継続日数は、2日以上連続して継続した地点のみを集計）。真夏日の日数は、東日本から沖縄・奄美にかけて平年を上回ったところが多かった。尾鷲（三重県）、巖手（長崎県）、延岡（宮崎県）など8地点で日数の最大値を更新し、高知、巖手（長崎県）など9地点では最大継続日数を更新した。日最低気温 25℃以上の日数は、東日本から沖縄・奄美にかけて平年を上回ったところが多かった。潮岬（和歌山県）、高知、巖手（長崎県）など21地点で日数の最大値を更新し、和歌山、巖手（長崎県）など11地点では最大継続日数を更新した。

6月、7月、8月、夏の猛暑日、真夏日、日最低気温 25℃以上の日数を14～18ページに掲載。夏の猛暑日、真夏日、日最低気温 25℃以上の日数を順位更新（3位まで）した地点を26～29ページに掲載。猛暑日、真夏日、日最低気温 25℃以上の最大継続日数を19～23ページに掲載。

地域平均平年差（比）と階級（2013年夏（6～8月））

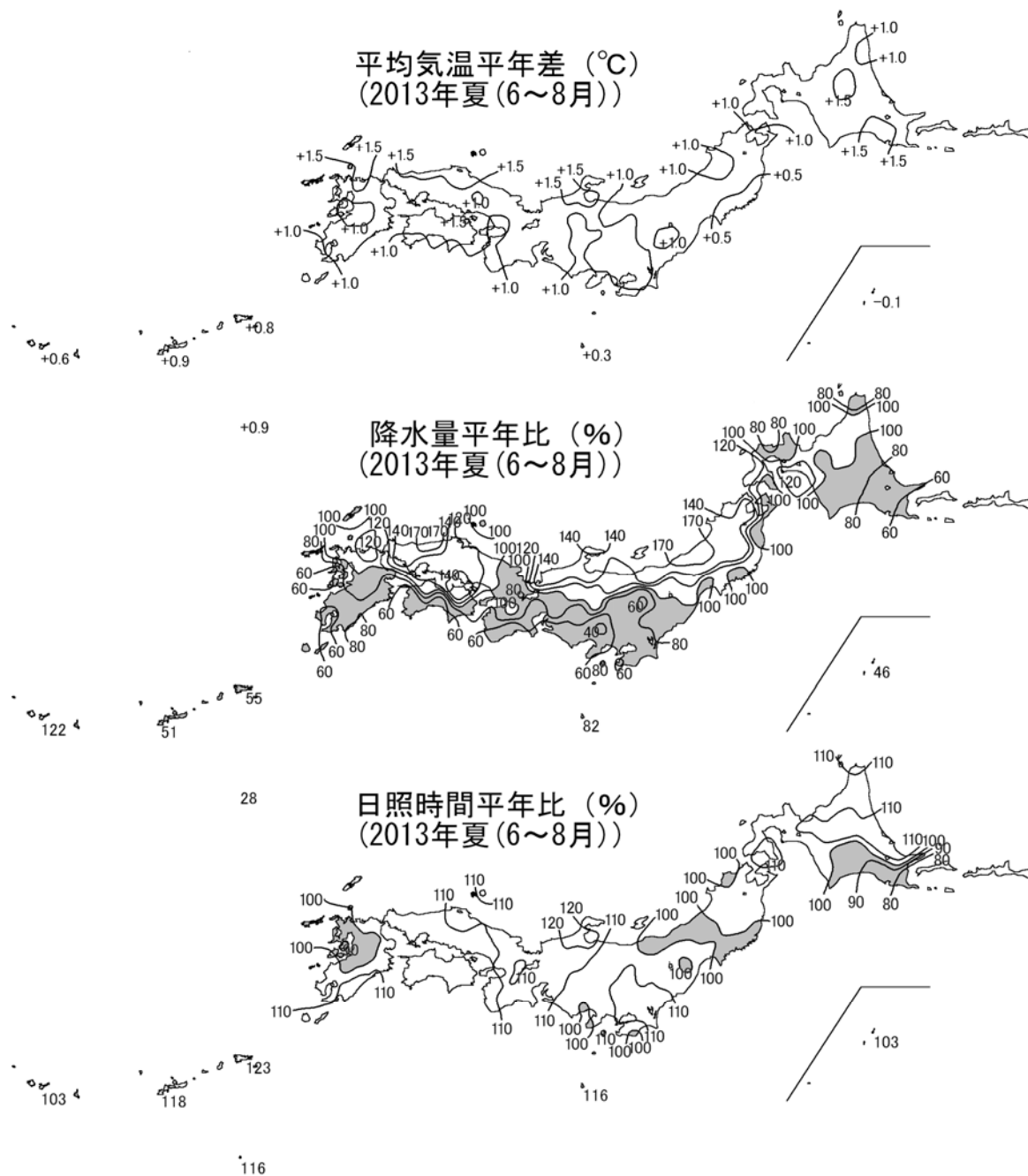
	気温 平年差 ℃（階級）	降水量 平年比 %（階級）	日照時間 平年比 %（階級）		気温 平年差 ℃（階級）	降水量 平年比 %（階級）	日照時間 平年比 %（階級）
北日本	1.0 (+)	107 (+)	104 (0)	北海道	1.2 (+)	96 (0)	105 (+)
		日 121 (+) 太 94 (0)	日 105 (+) 太 102 (0)			日 100 (0) 才 91 (0) 太 92 (0)	日 109 (+) 才 109 (+) 太 98 (0)
東日本	1.1 (+)*	87 (0)	110 (+)	東北	0.8 (+)	121 (+)	102 (0)
		日 151 (+)* 太 70 (-)*	日 112 (+) 太 109 (+)			日 152 (+)* 太 99 (0)	日 100 (0) 太 103 (0)
西日本	1.2 (+)*	95 (0)	106 (0)	関東甲信	1.1 (+)*	74 (-)	109 (0)
		日 104 (0) 太 88 (0)	日 105 (0) 太 108 (+)	北陸	1.2 (+)*	151 (+)*	112 (+)
沖縄・奄美	0.7 (+)*	67 (-)*	112 (+)*	東海	1.1 (+)*	64 (-)*	110 (+)
				近畿	1.0 (+)*	88 (-)	111 (+)
				中国	1.4 (+)*	128 (+) 陰 124 (+) 陽 133 (+)*	108 (0) 陰 111 (+) 陽 105 (0)
				四国	1.1 (+)*	85 (-)	106 (+)
				九州北部	1.3 (+)*	100 (0)	101 (0)
				九州南部 ・奄美	1.0 (+)*	65 (-)*	111 (+)
				本 奄	1.0 (+)* 0.7 (+)*	本 68 (-)* 奄 51 (-)*	本 109 (+) 奄 121 (+)*
				沖縄	0.7 (+)*	74 (-)	109 (+)

階級表示 (-):低い(少ない) (0):平年並 (+):高い(多い) 地域表示 日:日本海側 陰:山陰 本:本土(九州南部)
 (*):はかなり低い(少ない)、かなり高い(多い)を表す オ:オホーツク海側 陽:山陽 奄:奄美
 太:太平洋側

(注)・基礎となるデータは全国の気象台等での観測値で、観測所数は154地点である。

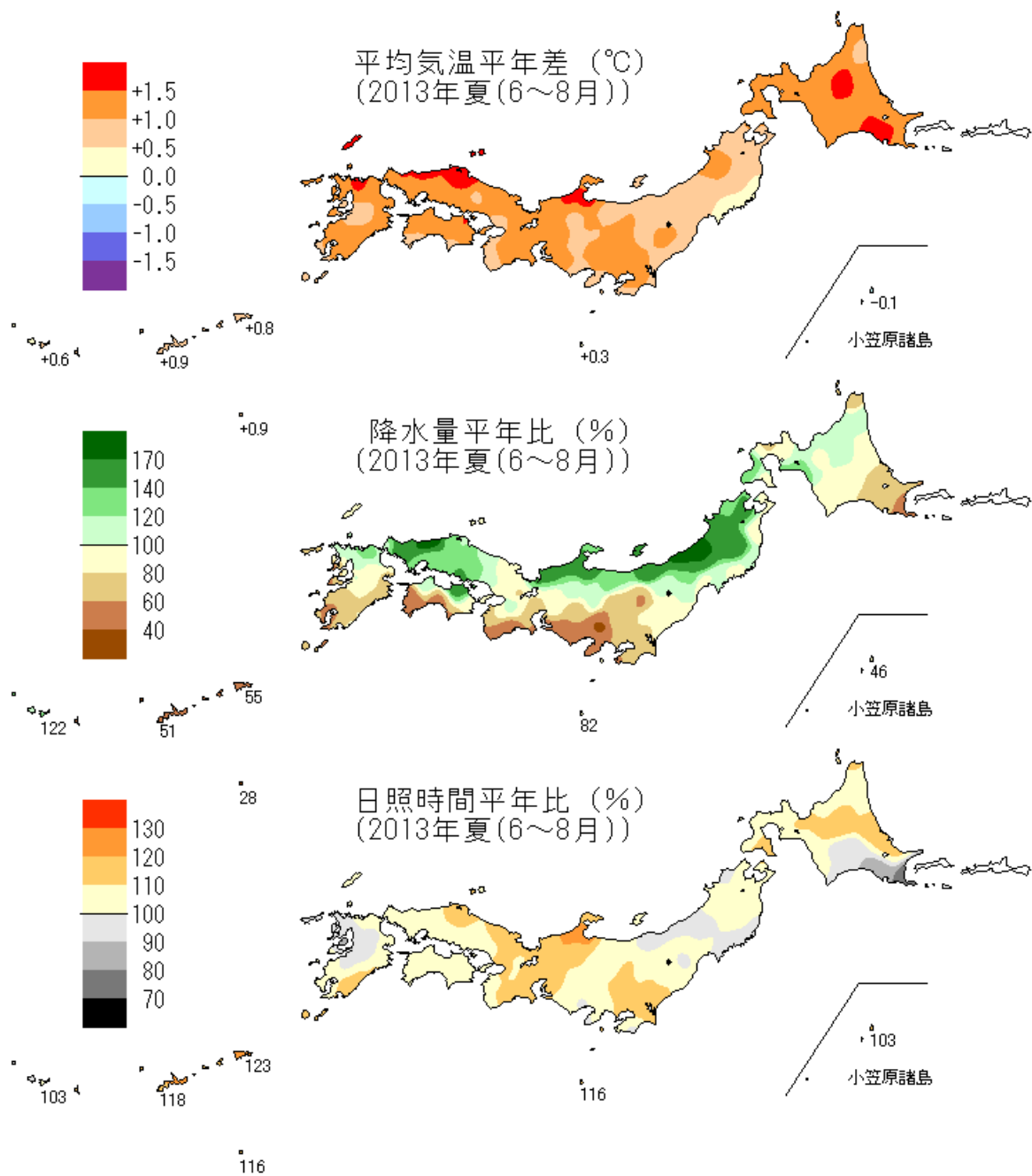
- ・「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の階級は、1981～2010年における30年間の観測値をもとに、これらが等しい割合で各階級に振り分けられる(各階級が10個ずつになる)ように決めている。また、値が1981～2010年の観測値の下位または上位10%に相当する場合には、「かなり低い(少ない)」「かなり高い(多い)」と表現する。

平年差（比）図（2013年夏（6～8月））（等値線図）



注）陰影の部分は、平年値より低い（少ない）地域を示す。

平年差（比）図（2013年夏（6～8月））



3 月別の天候経過

6 月：月前半は、北日本、東日本日本海側では高気圧に覆われて晴れる日が多く、降水量は平年を下回った。また、東日本太平洋側、西日本では、日本の南の梅雨前線や台風第3号の影響で曇りの日が多かったが、関東や九州の一部以外では降水量は平年を下回った。中旬は、暖かい高気圧に覆われ、また南からの暖気の影響も受けたため、北・東・西日本は高温となり、13日に全国の気象官署12地点で6月としての日最高気温の高い方からの1位を更新した。沖縄・奄美では、梅雨前線の影響を受けにくかったため晴れた日が多く、気温は平年を上回り、降水量は平年を下回った。

月後半は、北日本では、上空の寒気や梅雨前線の影響で曇りや雨の日もあったが、高気圧に覆われて晴れる日もあった。また、降水量は少ない状況が続いた。一方、東・西日本では、梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多く、降水量は平年を上回った。18日から21日にかけて西日本から東日本に停滞した梅雨前線や台風第4号から変わった低気圧の影響により、北陸、西日本、沖縄では大雨となり、総降水量が300ミリを超えるところもあった。23日から26日にかけて九州から日本の南海上にかけて停滞した梅雨前線と低気圧の影響により、西日本で大雨となり九州南部では400ミリを超えるところもあった。

7 月：月を通して梅雨前線が日本海から東北地方に停滞することが多く、太平洋高気圧は西日本を中心に張り出した。このため、西日本では、晴れの日が多く、太平洋側では降水量がかなり少なかったが、月の初めと終わり頃に前線や気圧の谷の影響で曇りや雨となり、28日には山口県や島根県では局地的に記録的な豪雨となった。東日本太平洋側では、上旬の後半から中旬にかけては晴れの日が多かったが、上旬の前半と下旬は気圧の谷や前線の影響で曇りや雨となり、特に下旬は雷を伴う大雨となったところがあった。北海道では北海道の東海上の高気圧に覆われて晴れの日が多く、降水量が少なかった。一方、東北地方と東日本日本海側では、曇りや雨の日が多く、梅雨前線の活動がたびたび活発化したため、大雨となった日があった。東北地方の降水量は平年の182%となり、1946年の統計開始以来7月としては最も多い記録を更新し、日照時間もかなり少なかった。

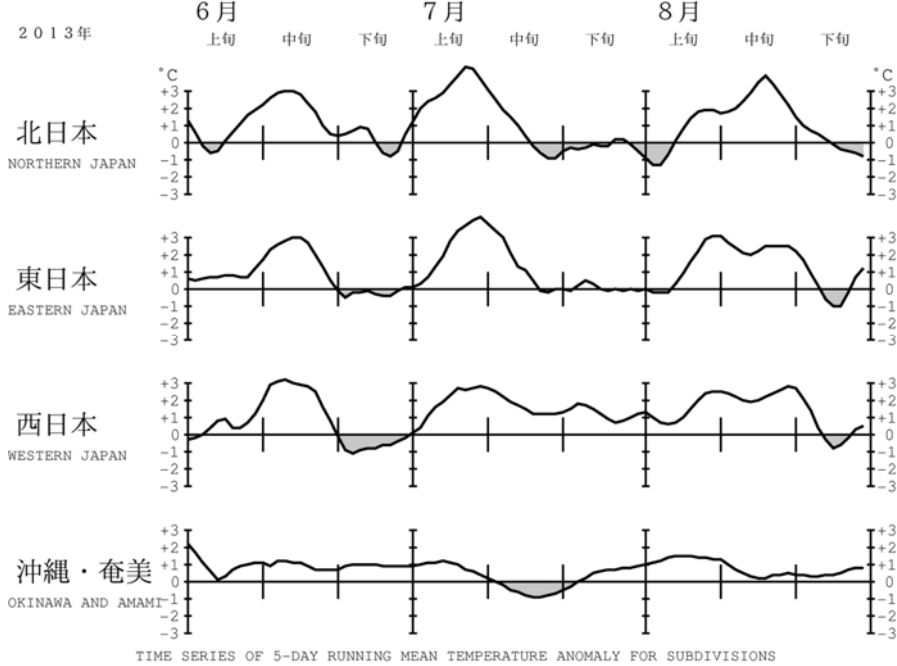
沖縄・奄美では、太平洋高気圧に覆われて晴れの日が多く、日照時間がかなり多く、名瀬（鹿児島県）や久米島（沖縄県）では月降水量が0.0ミリとなるなど少雨となった。一方、八重山地方では12日から13日に台風第7号の影響で暴風雨となった。

8 月：月を通じて太平洋高気圧が日本の南海上から西日本付近にかけて強かったため、東・西日本、沖縄・奄美では晴れて暑い日が多く、月平均気温はかなり高かった。北日本は、気圧の谷や湿った気流の影響で曇りや雨の日が多かったが、南からの暖かい空気が入りやすく、月平均気温は高かった。8月上旬後半から8月中旬は、日本付近で太平洋高気圧の勢力が特に強まり、東・西日本中心に、晴れて厳しい暑さが続いた。7日から22日にかけて、連日全国の100地点以上のアメダス観測所（集計地点数927）で猛暑日となり、11日は297地点で猛暑日となった。12日には、江川崎（高知県四万十市）で日最高気温が41.0℃となり歴代全国1位を更新した。8月上旬は沖縄・奄美で、8月中旬の平均気温は北・東・西日本で、それぞれの旬として1961年の統計開始以来第1位の高温となった。

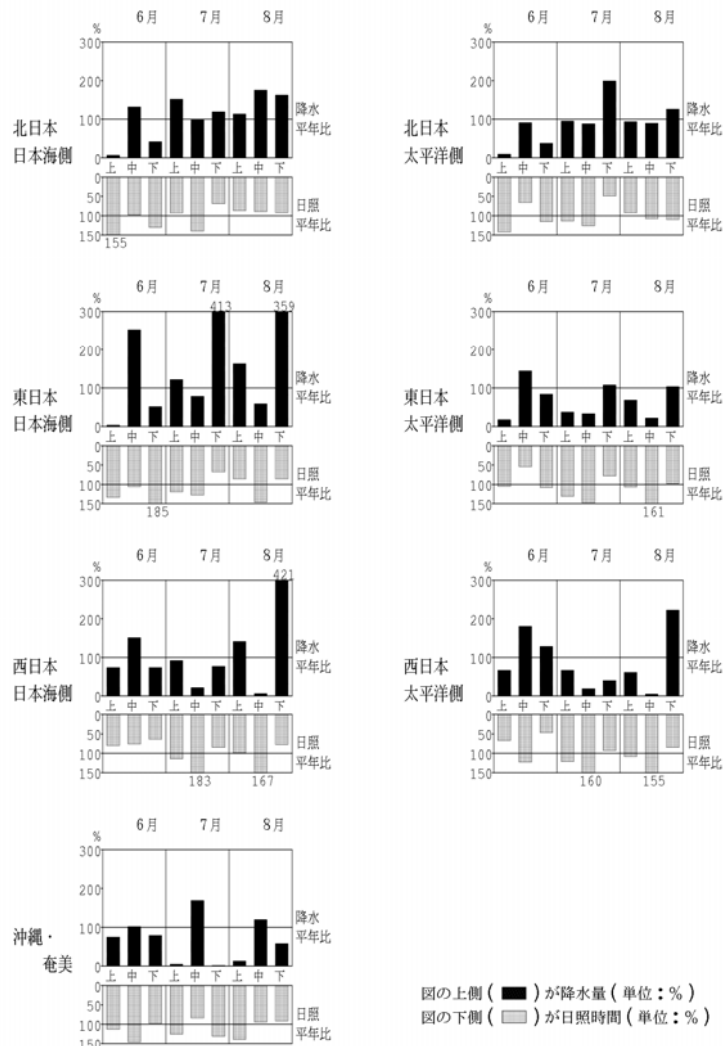
一方で、日本海側では西よりの湿った気流の影響で局地的に非常に激しい雨が降り、大雨となる日もあった。このため、月降水量は日本海側でかなり多かった。9日には秋田県と岩手県で、24日は島根県で記録的な豪雨となり、河川の増水や土砂災害が発生した。東日本太平洋側

と沖縄・奄美では、湿った気流の影響が小さかったため月降水量が少なかった。また、西日本太平洋側は平年並だったが、山陽や四国の瀬戸内側以外では少雨のところが多かった。これらの地方では、少雨の影響で農作物の被害が発生したところや、取水制限を実施したところがあった。

地域平均気温平年差の経過（5日移動平均）

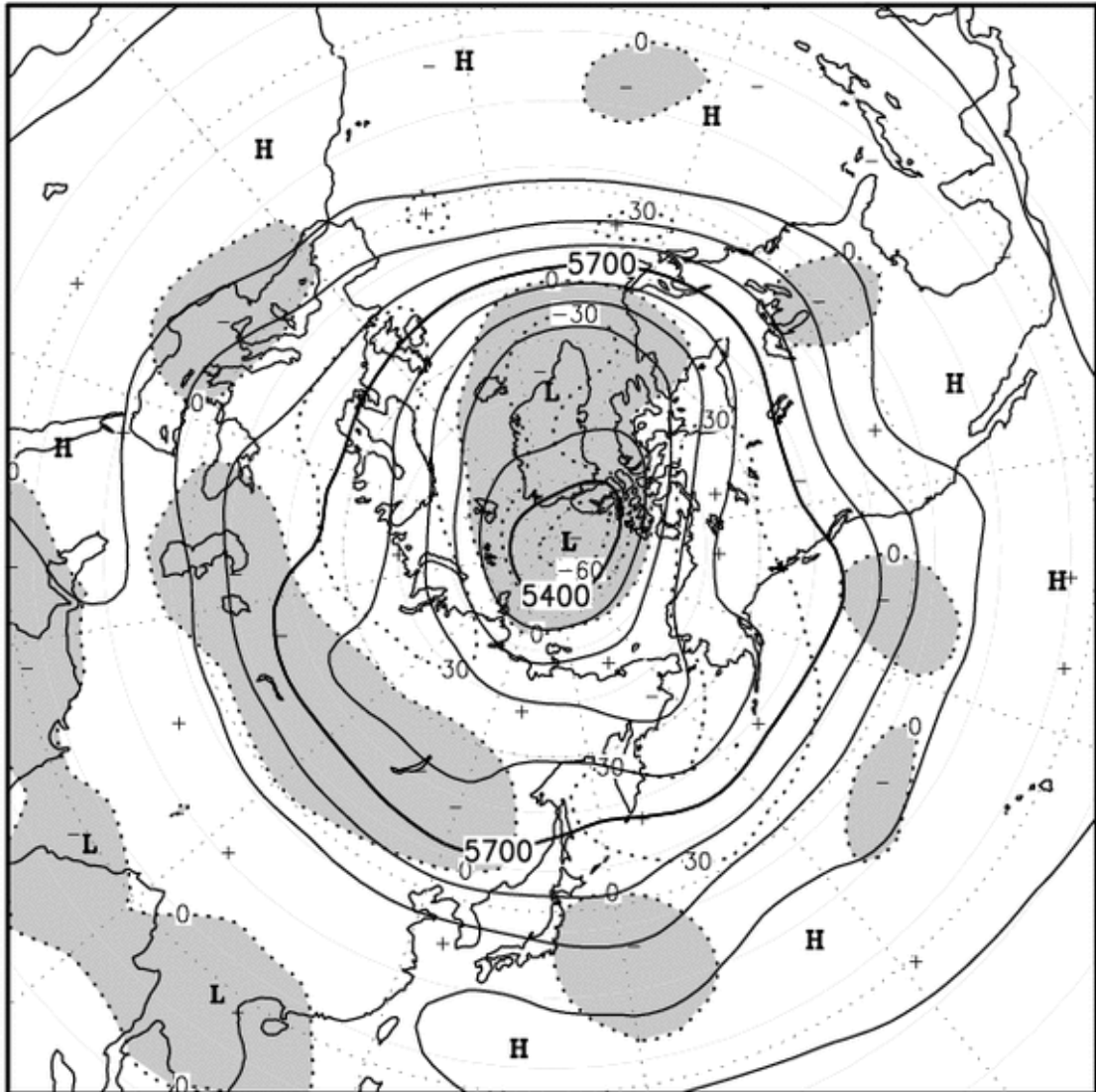


旬降水量および旬間日照時間の地域平均平年比の時系列



4 大気の流れの特徴

500hPa 天気図：亜熱帯高気圧が日本の南海上から西日本に張り出した。一方、三陸沖は気圧の谷となった。東・西日本と沖縄・奄美では太平洋高気圧に覆われる日が多かったことや、太平洋高気圧の縁を回って、湿った気流が日本海から入りやすかったことに対応している。また、オホーツク海付近も正偏差となっており、北日本も暖かい空気に覆われやすかったことに対応している。



2013年夏(6~8月)の500hPa高度・偏差(等値線間隔 実況(実線)60m、偏差(破線)30m)
陰影域は負偏差